

## 上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』

創文社，354頁，1991年

谷 隆 一 郎

本書は、キリスト教の歴史における修道制の起源と展開のかたちとを、歴史的かつ本質的に解明したものであり、十三の独立の論考から成っている。そのうち始めの二篇は修道の原範型とも言うべき砂漠の師父たちの姿やビザンツの修道制を、総論として提示したものであるが、他の十一の論文はすべて、西方ラテン世界とそれに続く時代における各々の修道制ないし修道会の基本的特徴を、言わば各論として説き明かしたものである。本書に収められた諸論文は、各著者の関心と資質を反映してそれぞれに特色のある優れた論述であり、しかもまた根本的な問題提起が為されているものも多く、啓発されるどころ誠に大であった。

ただもとより、全体として本書の取扱い内容は極めて多岐にわたり、時代は千数百年に及ぶのであってみれば、とりわけ個々の修道制・修道会の歴史的事柄については、評者など教えられることのみ多く、批評するに足る知識に乏しい。それゆえ、以下においては、各論文の主な論点を順次少しく紹介し、感想を僅かばかり付け加えることで、当面の責めを塞ぎたいと思う。

(1) 古谷功「東方キリスト教修道制の起源と展開」は、修道的靈性の発祥の地、エジプト（コプト）の砂漠に生きた隠修士の祖アントニオス（251/2—356）や共住修道制の父パコミオス（287頃—347）から説き起こし、砂漠の師父たちの静謐にして凄まじい自己探究の秘密を問うている。しかし、彼らはむしろ、殊更に特殊な生を送ろうとしたのではない。彼らの生にあってはむしろ、ただひたすら自己の邪悪さを凝視し、内的な静寂・観想の裡に神の生命との交わりに入りゆくことが志向されたと言えよう。本論文は、そうしたコプトの静寂主義靈性の後代での展開をも視野に入れつつ、特に砂漠の師父の珠玉の言葉に思いを潜め、神の働き（エネルギー）発現のかたちとしての、人間の正に普遍的な生のかたちを洞察しているのである。

(2) 大森正樹「ビザンツの修道制」は、前論文の後を承け、千年の長きに亘るビザンツの修道制について、ヘシカスム（静寂主義）に集約される霊性を中心に見据えて見事な展望を与えている。そこでは先ず、パンレイオス（330頃—379）の修道規則の節度ある姿が語られる。彼の採った共住修道制は家族的な円いそのものうちにキリストの愛が現成してゆくのを理想とするものであった。以後ビザンツ世界では様々な修道制の形態が現われるが、西方のように多数の修道会が生み出されることはなく、根底においては一つの修道会と言うべく、しかもそれぞれに独自性が存する。その歴史上、注目すべきはヘシカスムの霊性の潮流であり、その観点から新神学者シメオン（949—1022）のキリストの体の神学（われわれとキリストの体の統合）、アトス山のヘシカスム、パラマスのグレゴリオス（1359没）の対バルラム論争などに特に言及されている。因みに、東方キリスト教の霊性の残した無尽蔵の遺産は、われわれがその宝庫の扉を開けるのを時久しく待望しているという言葉で本論文は閉じられている。

さて、以下の十一篇の論文は目を転じて、西方の各修道制・修道会に関する個別研究という趣を呈する。即ち、

(3) 鈴木宣明「アウグスティヌスの修道霊性」は、アウグスティヌスの生涯と修道体験を、カッシアクム、タガステ、ヒッポ各地での修道に即して明らかにし、更には、「アウグスティヌス修道規則」の足跡、その修道霊性の聖職者共同体生活への展開を、イタリア、フランク王国、中世盛期の新生ヨーロッパの順で詳細に追跡している。そうした外的な経緯にも、西欧の父アウグスティヌスの神学・哲学がいかに修道院共同体におけるキリストの体（母なる教会）の完成のために捧げられていたかが窺い知られよう。

(4) 徳田直宏「ガロ・ロマン末期のローヌ修道制——レランス修道院とその周辺——」は、古ガリア修道制の一方の代表レランス修道院の成立事情を確認した後、その修道制の戒律の特徴を別出し、更にその修道院組織が指導者のカリスマ依存から脱却して制度的に確立してゆくゆえんを歴史学的に検証している。レランス修道院の人物史的考察、ガリア司教権力との関係についての記述なども興味深く、この方面に疎い者にとって多分に啓蒙的であった。

(5) 矢内義顕「聖ベネディクトゥスの『戒律』とその霊性」は、神の人（ベネディクトゥス）の生涯をグレゴリウス一世の『対話』に基いて概観した後、その『戒律』

の靈性の中心点（即ち、「神を求めること」と「神を求める生活を行うこと」）をあらわにしている。更に、具体的な修道院の生活を、労働、飲食物・衣服、睡眠、読書、聖務日課の各項目に分けて紹介し、「祈れ、そして働け」という『戒律』の精神を、主としてその実際面の記述を通して鮮かに浮彫にしている。

(6) 杉崎泰一郎「隠修士とその時代——ラ・グランド・シャルトルーズ修道院を中心に——」は、ブルーノ（1101 没）の隠修士生活に由来するカルトゥジヤ会を扱うものである。十一、十二世紀の隠修士たちが創出した新たな宗教的息吹は、その時代の社会・経済変動の中での「荒野」の創成に向けられ、世俗社会との利害のバランスではじめて実現されるものであったというが、本論文は、そこに内包された「解きがたい矛盾」を、教会改革との関わりなどの要因に注目しつつ見事に解きほぐして見せるのである。

(7) 岸ちづ子「シトー創立と〈使徒的生活〉」は、十一世紀後半の「使徒的生活像」を、「砂漠の師父たちの生活様式への回帰」と「ベネディクトゥス戒律の遵守という西欧共住型修道制への回帰」との緊張から説き起こす。そこで先ずカッシアヌスによる修道制の起源が問題とされ、そこからシトー創立者たちの創立精神や意図が解明されてゆく。シトー修道生活にとって、静隠・瞑想・聖なる休息は、いずれも観想と同義の語なのであった。

(8) 橋口倫介「騎士修道会の創設とその日常生活——Templiers を中心として——」は、十二世紀西欧の流動的革新的風土の中、「キリスト教徒騎士の世俗的願望と修道士の修徳生活との融合」という現象を、主としてテンプル騎士修道会に即して歴史学的に考察したものである。特に第二回十字軍以後、「祈りかつ戦うキリストの戦士」という道が開かれたが、テンプル十字軍はほぼ二世紀間にわたって修道騎士の存在を地中海世界に誇示し、その多彩な功罪を歴史に残すのである。

(9) J・フィルハウス「最初の律修参事会——プレモントレ会の創立をめぐる——」は、ノルベルトゥスが創立したプレモントレ会の成立と変遷を総合的に考察する。律修参事会とは司牧活動と修道的靈性とを結び合わせた共同体のことであったが、プレモントレ会はその類の最初の修道会として時代の要請に答えて急速かつ広範に普及してゆく。その靈性の根本は会が司祭共同体として存するという点であった。

(10) 坂口昂吉「フランシスコ会の創立をめぐる」は、史料の取扱いをめぐる研究史上の変化に注目しつつ、フランシスコ（1181-1226）の実像に迫ろうとする。そ

の登場は都市化社会と民衆宗教運動という十二世紀後半特有の史的條件あつてのものであるが、フランシスコは貧しきキリストへの随順という点で際立っている。本論文は更に、宗教的脱社会運動と教会内志向の矛盾、党派対立と会の分裂について歴史学的に明確な跡づけを示している。

(11) 宮本久雄「ドミニコの霊性と説教者兄弟会——言の新たな次元の開披——」は、説教者兄弟会（通称ドミニコ会）という一つの秩序体の霊性を、特に哲学的神学的観点から剔出したものである。本論文は、十三世紀という時代や、ドミニコの生涯についての的確な把握もさることながら、ドミニコの霊性の「言（神の子）と共に在る位相」と「その根底から言が働き出る位相」とを、トマス・アクィナスとエックハルトの言葉に拠って見事に語り出しており、安易な要約を許さぬものがある。

(12) 国府田武「ベルギー中世のベギン運動」は、十二世紀末ごろからベルギーを中心に北フランス・ラインラントでむしろ自然発生的に生まれた民衆の宗教運動を鋭く考察したものである。そうしたベギン運動の特徴は民衆の生活と観想生活の結合という点に存し、その霊性は神の前で孤独な個人の内省的信仰を旨とするものであった。（因みに、エックハルトはベギン運動の盛んであったケルンにて、説教者兄弟会の使命を担って発語したのである。）

(13) 田邊董「イグナティウス・デ・ロヨラの神秘体験——イエズス会の霊性の起源——」は、主として『自叙伝』と『日記』を克明に辿りつつ、イグナティウスの霊性とその神秘体験を闡明したものであり、聖人への愛を彷彿とさせる。イグナティウスはその神秘経験を通して「すべてのものの中に神を見出す生」を見、かつまた「神のより大なる栄光のために」働くことへとすべての人を招いているのである。

以上ほんの概観に止めざるをえなかったが、本書はそれぞれに個性豊かな、しかも普遍的な洞察にあふれた論考の集成であつて、それら多様な論で編り成された全体は、不思議にも人間のただ一つの真実を告げ知らせているかのようである。それは恐らく、己れがなみされるその根底に語りかける神の声への全き聴従であり、われわれの生として受肉する言・キリストのかたちなのであると考えられよう。

なお、本書の末尾に、各々の修道制・修道会に関する充実した文献表があることを付記しておく。